

「ウナギ文」分析における 認知的アプローチの役割と談話分析の可能性

新 妻 明 子

The Role of Cognitive Approach and the Possibility of Discourse Analysis
in the Analysis of “*Unagi*-Sentences”

Akiko NIIZUMA

2019年11月8日受理

抄 録

本稿では、日本語文法に特有の構文だと論じられ様々な議論が展開されている「ウナギ文」について、意味論と語用論による先行研究を踏まえつつそれぞれの必要性を再認識するとともに、会話における正しい意味解釈が遂行されるプロセスにおいて、先行研究のメトニミー分析をはじめとする認知意味論的アプローチが果たす役割に関する重要性を再考することを試みた。また、コピュラ文の分類等において英語の「ウナギ文」が独立した文タイプとして存在することは確認されていないが、会話中の事例としては英語にも「ウナギ文」があるといえることから、英語「ウナギ文」の存在について検討した。さらに、日本語文法という観点から日本語助詞の「は」に注目してみると、助詞「は」が「ウナギ文」というひとつの特有な文を多様に生産している所以であるかもしれないという可能性を示唆し、談話における機能的分析を新たに組み入れていくことを提案した。

キーワード：ウナギ文、意味論、語用論、メトニミー、助詞「は」

1. はじめに

日本語には「ぼくはウナギだ。」を典型的な例とする「ウナギ文」と呼ばれる構文があり、これを英語に訳す場合、そのまま“I’m an eel.”と直訳すると奇妙な意味として解釈されることになり、日本語文法特有の構文だと論じられている。これは、日本語の文構造が言語的・非言語的文脈に依存することが大きいと述べられるひとつの例であるとも考えられている。また、日本人学生の英作文にも“Japan is safety.”や“When I was high school, …”という文法的な間違いが多く見られるが、日本語で「AはBだ」という形式の文を英語にそのまま当てはめて“A + be動詞 + B”と表すことができるわけではない。さらに、このような間違いを指摘されないと認識で

きないのは、日本語の「AはBだ」という形式と英語の“A + be 動詞 + B”という形式の間の文法的な成立条件に違いがあるからである。一方、日本語の助詞の「は」は、日本語教育の現場において最も早い段階で導入される日本語の構文「AはBです」の一部として重視されているが、その概念は複雑であると認識されている。

本論では、「AはBだ」という形式の中でも特に「ウナギ文」と呼ばれる構文に焦点を当て、日本語の意味論的・語用論的理論による先行研究における疑問点を明らかにし、英語にも「ウナギ文」は存在するのかどうか検討しつつ、日本語と英語の両言語に共通の分析が可能なメトニミーによる分析の役割について再考し、認知的なアプローチによって「ウナギ文」の意味解釈のプロセスとその動機づけが可能であることを提案する。また、日本語助詞「は」に関する談話分析の先行研究から「ウナギ文」との関連を見出し、機能的談話分析を視野に入れた「ウナギ文」分析の可能性について探ることを試みる。

2. 「ウナギ文」の意味

2.1 「ウナギ文」とは

「ウナギ文」とは「ぼくはウナギだ。」という文のことであり、店でウナギ料理を注文する際に使用されると考えられる。この文は日本語文法研究において活発に議論されてきた。この「ウナギ文」に関して、金田一（1955）が最初に論じたとされており、その後奥津（1978）が「ウナギ文」という構文名を著書のタイトルに使用して以来、広く知れ渡るようになったと論じられている。このことについて、奥津（1978）では次のように述べている。

- (1) このように「ダ」を動詞または述語の代用とする考えは、すでに金田一春彦氏も示唆している。金田一氏は、「君ワ何オ食ベル？」に対して「ボクハウナギヲ食ウ」と答へる代りに「ボクハウナギダ」と短く言うのである」としている。
(奥津（1978：21）)

2.2 ウナギ文の意味構造

「ウナギ文」について、その文構造や意味解釈がどのような仕組みなのかという点をはじめとして様々な議論が展開されている。西山（2003）ではウナギ文を日本語コピュラ文であると分析し、全体として「前項Aの性質・属性を後項Bで表すもの」とする措定文であることを主張する。即ち、「AはBだ」という文において、前項Aの値を後項Bで指定するのではなく、後項Bは性質・属性記述であるとしている。

また、三上（1953）によると、日本語コピュラ文には「端折り文」という文型があり、以下がその例である。

- (2) a 僕はウナギだ。 僕の、注文した料理／一番の好物は、ウナギだ。
b 源氏物語は紫式部だ。 源氏物語の、作者は／空蟬のモデルは、紫式部だ。

「AのXはBだ。⇒ AはBだ」という意味構造を持つが、その分析において問題になるのは「この省略部分（X）を、Aに読み込む時の過程がどのようなものか」という問題である。まず、このXのような省略部分に何が省略されているのかという問題に関して、高本（1996）ではこれまでに提案されてきたウナギ文対するパラフレーズを次のようにまとめている。

(3) ウナギ文に対するパラフレーズ

Aタイプ：（ぼく＋（ウナギ＋X））

- | | |
|-----------------------------|--|
| 1 ぼくはウナギを <u>食べる</u> | 金田一（1955）、奥津（1978）、仁田（1980）、尾上（1981b）、藤田（1983）、杉浦（1991）、Muraki（1974） |
| 2 ぼくはウナギを <u>食べることにするのだ</u> | 川合（1978） |
| 3 ぼくはウナギを <u>食べたい</u> | 国立国語研究所（1963）、奥津（1983） |
| 4 ぼくがウナギが <u>食べたい</u> | 北原（1980） |
| 5 ぼくはウナギが <u>食べたいのだ</u> | 三上（1955） |
| 6 ぼくはウナギを <u>注文する</u> | 三上（1960）、国立国語研究所（1963）、久野（1978）、仁田（1980） |
| 7 ぼくはウナギを <u>注文したのだ</u> | Martin（1975） |
| 8 ぼくはウナギを <u>注文したいのだ</u> | 川合（1978） |
| 9 ぼくはウナギに <u>する</u> | 大久保（1973）、川合（1978）、尾上（1982） |
| 10 ぼくはウナギに <u>決めた</u> | 国立国語研究所（1963） |

Bタイプ：（（ぼく＋X）＋ウナギ）

- | | |
|-----------------------------|--------------------|
| 11 ぼくが <u>食べるのは</u> ウナギだ | 仁田（1980） |
| 12 ぼくが <u>食べたいのは</u> ウナギだ | 北原（1980） |
| 13 ぼくが <u>食べたいのが</u> ウナギだ | 北原（1984） |
| 14 ぼくの <u>食べたいのは</u> ウナギだ | 三上（1955）、佐藤（1989） |
| 15 ぼくが <u>注文するのは</u> ウナギだ | 森岡（1980）、尾上（1981b） |
| 16 ぼくの <u>注文するものは</u> ウナギだ | 仁田（1980） |
| 17 ぼくが <u>注文したいものは</u> ウナギだ | 川合（1978） |
| 18 ぼくの <u>注文は</u> ウナギだ | 三上（1960）、大久保（1973） |
| 19 ぼくの <u>注文が</u> ウナギだ | 山口（1965）、川本（1976） |

Cタイプ：（ぼく＋（X＋ウナギ））

- | | |
|----------------------------------|-------------------|
| 20 ぼくについて言えば、 <u>食べたいのは</u> ウナギだ | 川合（1978） |
| 21 ぼくは <u>食べたいのは</u> ウナギだ | 堀川（1983）、安藤（1986） |

Dタイプ：(X + (ぼく + ウナギ))

22 注文はぼくがウナギだ 山口 (1965)

23 食べるのは、ぼくはウナギだ 薬 (1988)

24 何を食べるかという、ぼくはウナギだ 島田 (1983)、全 (1992)

(高本 (1996 : 409))

このように、省略されているXが意味構造上どこに置かれているのかという点では、AタイプからDタイプまでの4つのタイプに分かれてしまい、パラフレーズを並べたところで、コンテキストによってこれ以外の多様なパラフレーズが生じてしまう。「ウナギ文」がどのように意味解釈されるか、という点で、省略されているXの存在を仮定することは必要であるが、その意味構造に関して明らかにする必要がある。

そこで、坂原 (1990) では、「私が注文したのはうなぎだ」のような文を「同定文」と呼び、それを次のように変換していくとウナギ文が形成されると考えた。

(4) a. 私が 注文したのは、 うなぎだ。→ [パラメータの遊離]

(パラメータ) (役割) (値)

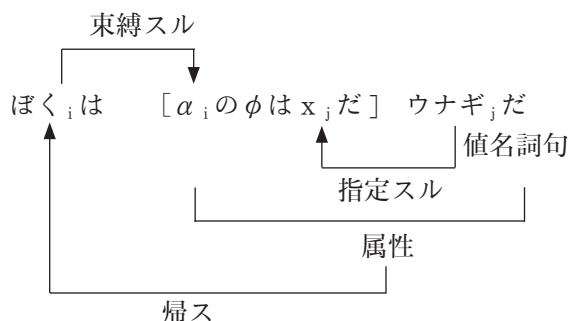
(4) b. 私は、注文したのは、うなぎだ。→ [役割の省略]

(4) c. 私は、うなぎだ。

「パラメータ」も「役割」も省略することができるが、「役割」が省略されるとウナギ文が形成される。この操作を文法的に説明すると、(4a) から従属節要素「私が」を主題化して(4b)を形成し、それから「注文したのは」という主題を省略すれば、(4c)のウナギ文が形成されるということである。

さらに、今井・西山 (2012) によると、「ウナギ文」の内的構造は次のように示されている。

(5) ウナギ読み：



(今井・西山 (2012 : 245))

「ウナギ文」では上の論理形式に自由変項φが含まれているため、これに飽和ⁱという語用論操作を適用する必要があり、飽和によってφに「注文料理」と要素が埋め

られると「ぼくは、注文料理はウナギだ」という読み方が成立するのである。このような意味論による論理形式を明確に規定することで、多様なパラフレーズによって説明されていた明意が明らかになったといえる。

2.3. コピュラ文の分類における日本語と英語の比較と「ウナギ文」の位置づけ

「ウナギ文」は日本語特有の現象として扱われているが、コピュラ文においてどのように分類されているのか英語と比較してみよう。「ウナギ文」は「AはBだ」という形式のコピュラ文の一種であり、コピュラ文は構文の中でも特殊な性質を持つ構文として扱われ、意味論や語用論の観点から議論されている。コピュラ文とは、英語「A is B」、日本語「AはBだ」という形式の文であり、大きく次の2つの形式に分かれる。

(6) コピュラ文「A is B」：A、Bは名詞句

- a. Ann is a happy girl.
- b. 太郎は大学生だ。

(7) 準コピュラ文「A is B」：Aは名詞句、Bは形容詞または形容詞句

- a. John is kind.
- b. 彼の考え方は独特だ。

先行研究における英語と日本語のコピュラ文の代表的な分類として、Declerck (1988) と西山 (2003) による分類を次の表にまとめ、「ウナギ文」がどのタイプに該当するのかを見てみよう。

(8) Declerck(1988) によるコピュラ文の分類

a. Specificational sentences (指定文)
The bank robber is John Thomas.
b. Predicational sentences (措定文)
John is a teacher.
c. Descriptively-Identifying sentences (記述的同定文)
Who's that man? That man is John's brother.
d. Identity statements (同定文)
The morning star is the evening star.
e. Definitions (定義文)
A motor car is a vehicle that has four wheels and is propelled by an internal combustion engine.

(9) 西山 (2003) によるコピュラ文分類

	「A は B だ」	「B が A だ」
1	措定文 「あいつは馬鹿だ」	
2	倒置指定文 「幹事は田中だ」	指定文 「田中が幹事だ」
3	倒置同定文 「こいつは山田村長の次男だ」	同定文 「山田村長の次男がこいつだ」
4	倒置同一性文 「ジキル博士はハイド氏だ」	同一性文 「ハイド氏がジキル博士だ」
5	定義文 「眼科医(と)は目のお医者さんのことだ」	
6		提示文 「特におすすめなのがこのワインです」

(西山 (2003: 122))

西山 (2003) は(9)の分類表に「ウナギ文」を含めていないが、「ウナギ文」をコピュラ文の種類のひとつとして記述し、「ウナギ文」が日本語コピュラ文の措定文であることを主張している。即ち、前項Aの値を後項Bで指定するのではなく、後項Bは性質・属性記述であるとする。また、その特徴について以下のように述べている。

- (10) ウナギ文「ぼくは、ウナギだ」は、措定文であり、その言語的意味（ウナギ読み）は、〈ぼくは、[ϕ はウナギだ]〉である。そして、コンテキストから、語用論的な補完操作によって ϕ の中身が補完されれば、たとえば「ぼくは、注文料理はウナギだ」という解釈が得られる。これは、ウナギ文の発話が伝える内容、すなわち表意であって、ウナギ文自体の言語的意味ではない。

(西山 (2003))

措定文は、Declerck(1988) の (8b) Predicational sentences に相当し、西山 (2003) の規定と比べても相違点はないといえる。しかし、「ウナギ文」のような特別な種類のコピュラ文は扱っていないため、英語に「ウナギ文」が存在するかどうか疑問である。

3. 英語の「ウナギ文」は存在するのか

前述したコピュラ文の分類によると、英語には「ウナギ文」に相当するタイプが存在せず、これまでの「ウナギ文」の先行研究においても日本語特有の現象として分析されているが、英語の「ウナギ文」は認められないのであろうか。山本 (2006) では実際には外国語にも見られるものであるとして、次の池上 (2000) の例を取り上げている。

- (11) 注文の品を運んできたウェイトレスが、どちらが何を注文したのか、テーブルのところで少しためらう瞬間があった。その時、グリーンバウム教授の発したことばが ‘I’m fish’ であったのである。実は筆者にとっては、この種の言い方を意識して耳にしたというのはこれが初めてのことであった。しかも、それが事もあるように現代英文法の権威とされている人が口にするのを聞いたというのが、ひどく嬉しく感じられた。

(池上 (2000 : 30-31))

これとほぼ同様の例について述べているのが Hoffer (1972) にも見られる。Hoffer (1972) は、「ウナギ文」について、日本語の「ぼくはウナギだ。」は、英語では “He is the spaghetti.” に相当するとしてこの文について次のように述べている。

- (12) Most traditional classroom teachers of English would mark such a sentence as unacceptable in class; yet, most English speakers use the construction naturally and interpret it easily and without noticing any peculiarity as long as we are dealing with spoken English. The sentence could be heard in any restaurant. Consider a situation in which a waitress approaches a table with several dishes on her tray. This conversation might take place.

Waitress: “Now, who is the veal parmesan and who is the spaghetti?”

Patron : “I’m the veal; he’s the spaghetti.”

In different situations, sentence 15ⁱⁱ could refer to the cooker of the spaghetti, an artist who drew a picture of spaghetti, a gourmet specializing in spaghetti, or any one of many other possibilities. The structure here is just one NP in an unspecified semantic relation to the other. The basic structure, then, can be fully accounted for by deriving it from the copular sentence pattern. In terms of basic sentence contrast, English and Japanese share this pattern.

(Hoffer (1972:221-222))

また、藤本 (2002) では、奥津 (1993) から英語の「ウナギ文」の例を抜き出したものを次のように挙げているⁱⁱⁱ。

- (13) I am the coffee. のように the を付けて言うことができるし、the なしでも可能。
(14) I am a cheese hamburger. は、例えばハンバーガー店で、いろいろな種類のをまとめて買ってから、それぞれが注文したものに分けるときなどに可能。
(15) I’m the veal; he’s the spaghetti. は、ウェイトレスが注文の品をテーブルに持ってきてから、誰が何を注文したか、を聞いたときの答えとして可能。
(16) A : Let’s see, sir. You’re the black coffee with sugar?”

B : Right.

C : I'm the coffee with cream and sugar, Beetle.

A : Okey. (to D) Then you must be the cream and sugar with no coffee, sir.

D : I don't like your tone of voice.

これはアメリカの兵隊漫画で兵隊Aが注文されたコーヒーを上官B, C, Dに配っている場面。

(17) Are you a chicken or a steak? は、機内食を配りながら乗客に聞く場合に可能。

(18) What you want is Missing persons. I'm Homicide.

これは「刑事コロンボ」の一節で、警察署に来た人に刑事が「行方不明捜査課へ行って下さい。ここは殺人課です」という意味のことを言っている場面。

(奥津 (1993 : 247-252))

さらに、その他の英語の「ウナギ文」の事例として、小島 (1998)、鈴木 (2000)、高橋 (1992) を取り上げ、「ウナギ文」の使用場面やストレスを指摘している。

(19) I'm coffee. は「ぼくはコーヒーを飲む」という代わりの表現として可能である、ストレスは coffee にではなく、I に置かないといけない、しかも複数の人たちがそれぞれ注文する場合とか、ウエイトレスが注文品をテーブルに持って来てから客が自分の頼んだものをもらう場合にしか使えない、と述べている。

(小島 (1998:178-183))

(20) I am noodles. が「私は蕎麦を食べる」の意味で可能だとした上で、ストレスは noodles ではなく I に置かないと、「私自身が蕎麦である」になってしまう、と小島 (1998) と同じストレスの置き方を主張している。

(鈴木 (2000:30-31))

高橋 (1992) は、「これ (『ぼくはウナギだ』) に類した言い方が、西洋語の『代表』として『論理的な言語』とされるらしい英語にもある。」として、R. Quirk et al: A Comprehensive Grammar of the English Language (Longman, 1985) で取り上げられている以下の例を紹介している。

(21) Quirk et al (1985) の例

a. Are you cosmetics?

b. Are you 103?

(21a) は例えば、デパートの売り場で「ここは (おもちゃ装飾品ではなくて) 化粧品を扱っていますか」と店員に聞く場合に可能、としている。(21b) は、ホテルの部屋番号を聞く場合に、「あなたの部屋は (104 号室ではなくて) 103 号室ですか」という意味で可能、としている。

なお、原著にはこの他に次の例が出ている。

c. Are you church or chapel?

これは「あなたは英国国教会 (the Church of England) のメンバーですか。それとも、英国国教会以外の教会のメンバー (nonconformist) ですか」という意味である、との説明がある。また、(21a) の場合は、Are you selling cosmetics? の述語部分の selling が省略された形 (a compressed form of the predication) であり、(21b) と (21c) については、形容詞的用法と考えられる、と解説されている。

高橋 (1992:2)

これらの例から英語にも日本語と同様な「ウナギ文」があると断定することは不可能であるが、“A BE B” の A と B の関係についてつの共通点を見出すことができる。

- (22) ① A : 注文した人 B : 注文した物が運ばれてきた時に A が受け取る物^{iv}
② A : 主体となる人 B : A が所属している場

(22) ①と(22) ②に共通に見られるように、「A / B が B / A を所有している」という関係が成立することが明らかであり、A と B に一定の関係が成立する場合に“A BE B” が成立すると仮定することができるのか、という新たな疑問が生じる。

4. 語用論的分析とメトニミー分析

2.2 で見てきたように、三上 (1953) による「A の X は B だ。⇒ A は B だ」という意味構造の省略部分 (X) を、A に読み込む過程は、今井・西山 (2012) で飽和という語用論的操作によるものであると提案されたが、語用論的なアプローチからはどのように分析されているのだろうか。また、英語の例から見出された A と B の関係に焦点を当てた分析、即ち A と B がメトニミーであるとするアプローチからはどのように分析されているのだろうか。

4.1. 語用論的分析

池上 (1981) は「ウナギ文」を場所理論の立場で捉え、「ぼくはウナギだ」の「だ」を「である」に分解し、「である」の「で」は場所的・時間的近接関係を表し、「ある」は存在を表す、と主張している。「同一関係」、「包含関係」、「ウナギ文」のいずれの「Y は X だ」構文も「近接関係」を表し、近接関係を WITH、存在を BE と表示すると、「Y BE WITH X」のような構造を持つとして、「ボク」と「ウナギ」という対象の間にある種の近接の関係 (何らかの密接な関係) があることを表す。この近接関係は、コンテキストによって具現化され、「ぼくの注文したもの／釣ったもの／描いたもの／欲しいもの等は、ウナギだ」ということになる (池上 (1981 : 36-37))。

今井・西山（2012）では、「ウナギ文」の意味解釈には飽和という語用論操作が必要であるとしているが、池上の主張する「ぼく BE WITH ウナギ」という論理形式を基礎にどんなに語用論的操作を適用したところで2.2の（ ）のような内的構造を持つウナギ読みの明意を得ることはできないと批判している（今井・西山（2012：247））。

また、高本（1996）は「ぼくはウナギだ。」の「ぼく」と「ウナギ」の関係について、「ぼく」と「ウナギ」の間に同一指示関係を想定したり、「ぼく」を「＜ウナギ＞^v」というクラスの成員だと想定すると、「ぼく」と「ウナギ」または「＜ウナギ＞」の間に同一関係または包摂関係があると捉えられ、それらの関係がデフォルトであると考えている。また、この関係を「関係R」とし、「ウナギ文」の語用論的分析の結論を次のように述べている。

- (23) 「AはBだ」形式の発話で、AとBとが同一関係や包摂関係にあるというデフォルト解釈がキャンセルされるとき、この発話が有効な文脈効果をもつためには、AとBとの間の二項関係Rについて、一歩先に進めた文脈推論が必要であり、その推論効果は、二項述語のPによって明示することができる。「ぼくはウナギだ。」の先行研究の多くに登場した、「食べる」「注文する」などの動詞は、推論成果を明示する（すなわち、解釈を記録する）という役割を担ったものだったのである。
（高本（1996:414））

このように、「ウナギ文」の意味解釈には語用論的操作が必要であることは明らかであるが、語用論的分析において、「AはBだ」におけるAとBの関係性を具現化させることも必要であることが示されている。さらに、その関係性について、近接関係や包摂関係はメトニミー関係であるともいえることから、メトニミーによる分析についても見ていくことにする。

4.2. メトニミーによる分析

山梨（1988）は、「ウナギ文」自体を「広い意味での換喩ないしはメトニミーの一種とみなす」（山梨（1988:121））と捉え、「問題の行為の必要条件の一部分だけを表現することにより、問題の依頼行為そのものを伝える」（山梨（1988:118））と説明している。つまり、「行為の必要条件の一部分」で「依頼行為」全体を表すという＜部分－全体＞の換喩またはメトニミー関係であると言い換えることができる。しかし、これは文自体のことであり、「AはBだ」という「ウナギ文」のAとBの関係ではない。そこで、「連結メトニミー」としての分析を提案している山本（2006）の分析を見てみよう。

山本（2006）では、メトニミーを「隣接性（contiguity）による転義」として、「文字通りの意味（literal meaning）」をソース、「意図された意味（intended meaning）」をターゲットと呼び、転義の過程を「ソース→ターゲット」と示している。

例えば次の (24) のとおりである。

(24) 風車が回っている。 [全体 → 部分]

この場合、「風車と羽根」という関係は「風車」に本来的に備わっている「全体と部分」という関係であるが、「ウナギ文」の場合には次のように「関連概念」を使って示す。

(25) ぼくはうなぎだ。 [主体 → 関連概念]

(25)の例文において「ぼく<注文料理>うなぎ」のような「主語<意味的連結部分>述部名詞」という意味的關係を仮定し、述語との関わりにおいてのみ意味が立ち表れるターゲットの介在によってソースと述語が連結されるタイプのメトニミーを「連結メトニミー」と定義している。そして、「連結メトニミー」の意味の二重構造について、以下のようにまとめている。

(26) 言語表現としての伝達内容は、(拡張された) 対象「全体」と「述部名詞」との「対応関係」の叙述である。しかし、述語と直接関係するのは「部分」としての「関連概念」である。
(山本 (2006 : 133))

このような定義づけに基づいて、ウナギ文は「ソース→ターゲット」が「<主体<関連概念>>→関連概念」として示される「連結メトニミー」であると分析し、次の例文において、コンテキストによって具現化される「関連概念」の例を「 」内に示している。

(27)

- | | |
|----------------------------------|-----------|
| a. <u>君</u> はかわいい目だな。 | 「身体部分」 |
| b. <u>英会話</u> はやる気です。 | 「必要な特性」 |
| c. <u>あの顔色</u> は不採用だった。 | 「示している内容」 |
| d. <u>年をとっての親孝行</u> はやっぱりお嬢さんね。 | 「行為の具現者」 |
| e. <u>漱石</u> は猫で、 <u>鷗外</u> は雁だ。 | 「扱った対象」 |

(山本 (2006 : 136))

上記の例文の下線部の「関連概念」はコンテキストによって具現化されて意味解釈されることになるのである。結論として、「ウナギ文」の認知メカニズムについて次のようにまとめている。

(28) 「ウナギ文」の言語表現としての伝達内容は、「主語」と「述部名詞」との「対応関係」の叙述であるが、述語と直接関係するのは「関連概念」であるという意味

の二重構造があり、この「関連概念」は文脈によって具体化される。これが、連結メトニミーとしての「ウナギ文」の認知メカニズムである。

(山本 (2006 : 137))

メトニミーの指示関係は抽象的なものと具体的なものを結びつけるとも論じられているが、山本 (2006) による「関連概念」という分析は、「ウナギ文」内の A と B の関係性と、どこからどこまでを「近接関係」と捉えるのかという疑問に関して妥当性のある提案であるといえるであろう。ただし、前節の語用論的分析においても指摘されたように、メトニミー分析においても、今井・西山 (2012) の主張するような意味論的内部構造は想定しておらず、特に日本語においては題目助詞「は」の機能^{vi}にも注目する必要があると考えられるため、論理形式についてどのように考えるのかという疑問が残る。

しかし、「ウナギ文」だけに限らず、ある文が何を意味しているのかという意味解釈におけるメトニミー的な推理は必要不可欠であるといえるであろう。辻・井上 (2008) で述べられている例をもってその必要性を示す。

- (29) They were told to expect the prime minister at twelve the next day.
Punctually at noon the car drew up in front of the State Department.
(彼らは翌日の 12 時に首相を待つように言われた。きっかり 12 時に、車が国務省の前に止まった。)

この文には、「車」(the car) が首相を指すとする解釈と、あるタイプのトークンであるとする解釈がある。文芸理論家の間では、まだ広範にメトニミーとして認められているというわけではないが、「車」が首相を指すと考えことは、まさにメトニミー的推理に動機づけられている。「ハムサンドイッチが支払い待ちでイライラしている」という文を理解する上で、聞き手が〈部分－全体〉関係を知っていなければならないように、上の文では、「車」が首相とは何らかの代替関係を結んでいとメトニミー的に推理される。話し手がその発話において何を意味しているのかを会話において推論する上で、多くの場合はメトニミー的推理が不可欠であり、テキストや談話理解において結束性を高める重要な仕組みとして、このように多くの事例で役割を果たしているのである。

(辻・井上 (2008 : 344-345))

5. 認知的アプローチの必要性と日本語「は」の特性

これまで見てきたように、「ウナギ文」は特殊な特徴を有する文であるため、なぜ成立するかという意味構造と意味解釈を明確にする必要がある。一見単純に見える構造であるからこそ、意味論からのアプローチによりその内部構造を記述してコンピュータ文の中での位置づけを示すことは重要である。さらに、意味解釈のプロセスには語用論操作が必要であり、その操作の詳細分析に関してメトニミーによる分析も有益であ

ることが先行研究から示されている。どちらのアプローチからの分析においても、基底となるコピュラ文からどのように特殊な「ウナギ文」が成立するかという分析によって妥当な提案が導かれていることから、認知的アプローチにより、「ウナギ文」をプロトタイプとなるコピュラ文から派生された構文であるという分析も提案したい。さらに、「ウナギ文」が日本語特有であると断定できるかどうかは第3章の英語のウナギ文例で疑問を投げかけたとおりであるが、先行研究を整理してみると、明らかに日本語の方が生産性が高く、「こんにゃくは太らない。」を代表例とする「コンニャク文」と呼ばれる文まで存在する。「コンニャク文」に関しては今後の課題としてまた稿を改めることにするが、これらの背景には日本語の助詞「は」の用法による影響が考えられると提案する。

5.1. 認知的アプローチによるコピュラ文カテゴリー

先行研究におけるコピュラ文の分類で示されたとおり、「ウナギ文」を措定文の一部であると仮定し、措定文をプロトタイプと考えると「ウナギ文」はその派生的な文であると考えられる。坂原（1990）では「ウナギ文」は同定文から役割を省略し、パラメータと値が残った文であると示しているが、西山（2003）では措定文と分類している。両者に矛盾点はあるものの、「ウナギ文」を分類上はコピュラ文のひとつのタイプとしている点で、認知的アプローチにより分類されたコピュラ文間にどのような派生関係があるのか探ることができると考えられる。具体的には、「AはBだ」というコピュラ文を字義どおり「 $A=B$ 」とする論理形式と意味解釈がプロトタイプとなり、そこから拡張によって複数のタイプのコピュラ文が生じていると考える。また、AとBの名詞句に関してもメトニミーによる意味拡張が見られることから、派生のプロセスを認知的アプローチによって分析する必要がある。第4章で取り上げたメトニミーによる分析では、AとBの関係性に関する拡張から「関連概念」という提案を取り上げたが、この拡張は文単位にも影響を与えていると考える。4.2で取り上げた2文の物語形式による文章の解釈にもメトニミー的推論が関与していることを示したが、複数の文の間関係性を分析するためには文単位での意味拡張の可能性を考慮していく必要があると考える。このような観点から、コピュラ文をひとつのカテゴリーとして派生関係を探る認知的アプローチを加えることによってひとつの文ではなく複数の文から成り立つ文章の解釈における分析可能性が期待できる。

また、メトニミー表現の処理について、辻・井上（2008）では、「エラー補完モデル（error recovery model）」と「同時処理モデル（concurrent processing model）」の2つの方法があると論じられている。「エラー補完モデル」では、慣習的な意味ではうまくいかないことがわかってから意味の創造が始められ、「真実性の公理（maxims of truthfulness）」に違反すると理解した後で比喩的な解釈の必要性を意識する（辻・井上（2008:359-360））。一方、「同時処理モデル」では、「比喩の意味が確定する際には意味の創造と意味の選択の処理が同時に、おそらくは互いに競争しながら働いている」（辻・井上（2008:360））。そして、この2つの仮説を実験によって

検証した結果、メトニミー表現を解釈しなければならない内容の文章に対する読解時間が同じだったことから、エラーの補完が行われているのではなく、ある句の意味の創造と選択が同時に行われていると考えられると導いている。このように、認知レベルで行われている処理を検証することによって複雑に見えるメトニミーを瞬時にどのように解釈しているのか解明する必要がある。

5.2. 日本語「は」の特性

日本語の助詞「は」は、一般的に主題や対比を表す助詞として知られている。Kuno (1973) は、「は」は、談話の中で「照応・予測可能な情報 (anaphoric information)」、または、照応・予測を必要としない「総称名詞句 (generic noun phrases)」^{vii} に付随する際に「主題 (theme)」を表すと述べ、それ以外の情報に付随する場合は「対比 (contrast)」を表すことを強調している。また、前述したように、通称「コンニャク文」と呼ばれるタイプのコピュラ文もあり、次のように述べられている。

(30) こんにゃくは太らない。

もちろん、この文が問題となるのは、「太らない」のが「こんにゃく」ではなく、それを食べる人間様の場合である。
(金谷 (2003 : 84 改))

「コンニャク文」も「ウナギ文」と同様コピュラ文の一種であり、「ウナギ文」がその中の「役割」を省略した文であるとする、「コンニャク文」は「属性」が省略された文であるといえる。意味解釈として「こんにゃくは太らない (食品だ。)」と考えられるように、「コンニャク」と「食品」の関係に「部分」と「全体」という関係が成り立ち、その片方である「食品だ」という部分が省略されているということもいえる^{viii}。これは、意味解釈の観点からは「ウナギ文」と共通点があると考えられるが、形式的な観点からは「～だ」の部分が省略されているため、「ウナギ文」との共通点は「は」であり、これに焦点を当てることによって日本語の特徴や英語との相違点が明らかになる可能性があると考ええる。

さらに、意味解釈には語用論的分析が必要であることを主張してきたが、日本語助詞「は」は、談話において発話頭に現れることも観察されており、(下谷 (2010)、宮本 (2013))。

(31) A : あ よっちゃんさん 62 さんは どちらにお住まいですか？

B : は 富士市です

(宮本 (2013:30))

(31) の B のセリフは省略されている部分を補うと、「住まいは富士市です」と「よっちゃん

んさん 62 さんは富士市です」という 2 つの復元文が考えられ、後者は「ウナギ文」となる。「ウナギ文」は同定文から役割を省略した文であるとの分析も取り上げたが、談話になるとさらに省略される要素が出てくるため、当然語用論的操作によって解釈が成立しているといえる。しかし、そのような解釈を成立させるためには、どの要素をどの程度まで省略できるのか、何か規則性はあるのか、という疑問が生じる。三上 (1960) では「象は鼻が長い」の「は」は主題であるとともに強調の助詞であり、「象の鼻が長い」の「象」を強調していると論じている。宮本 (2013) の談話分析において、助詞「は」そのものが備え持つ「対比・対照」「主題化」といった性質に加え、「発話頭の『は』が、前節する語句を省略するというより、むしろ浮かびあがらせることで『擬似的な共話』を構築していると捉えることができる」(宮本 (2013:19)) と結論づけており、言語が表出される過程で省略されるメカニズムや、談話における省略の効果についてはより機能的な分析が必要であろう。このように、日本語「は」の機能とコピュラ文に何らかの関係がある可能性を明らかにしていき、「は」の機能的な分析と日本語コピュラ文との関係を探ることは今後の課題である。

6. おわりに

日本語文法特有の構文である「ウナギ文」についてコピュラ文の先行研究とともに概観し、一見単純そうに見える「A は B だ」、「A BE B」という形式の文がいかに複雑で多様な構造と解釈を備え持つかという点について論じた。従来メトニミー現象として取り上げられることが多かったが、今井・西山 (2012) の指摘しているように、意味論による内的構造を明らかにすることの必要性和重要性を改めて確認した。加えて、意味解釈には語用論的分析によってそのプロセスを明らかにすることも必要であることも再認識した。「飽和」という操作だけでは説明することが不十分であると考えられる「A は B だ」の A と B の関係性と意味解釈のプロセスを明らかにするためには、メトニミーによる分析が有効であると考え、認知的アプローチによる分析が意味解釈のプロセスにおける動機づけに果たす役割の重要性を提案した。また、日本語助詞「は」の機能について、談話分析による先行研究から「ウナギ文」との関連性を探ろうと試みた。「ウナギ文」自体が文のある機能を省略している文であり、談話における発話レベルになるとさらに省略される部分があることを指摘し、助詞「は」の機能的分析と「ウナギ文」との関連性を示唆する可能性を示した。

【参考文献】

- Declerck, Renaat. (1988) Studies on Copular Sentences, Cleft and Pseude-clefts.
Holland/USA: Lervén UP
- 藤本規夫 (2002) 「辞書ではよくわからない英語の語句と用法—その 2 : 「英語で『ウナギ文』は可能か?—」 広島文教人間文化 2 67-70
- Gibbs, Jr., Raymond W. (1994) THE POETICS OF MIND: Figurative Thought,

- Language, and Understanding. Cambridge University Press レイモンド・W. ギブズ Jr. (2008) (監訳) 辻幸夫、井上逸兵 『比喩と認知—一心とことばの認知科学—』 研究社
- Hoffer, Bates (1972) 'Contrastive analysis of basic sentence patterns in Japanese and English' 『日英のことばと文化』 213-222 宮内秀雄教授還暦記念論文編集委員会 (編) 三省堂
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学 言語と文化のタイポロジーへの試論』 大修館書店
- 今井邦彦・西山佑司 (2012) 『ことばの意味とはなんだろう—意味論と語用論の役割』 岩波書店
- 金谷武洋 (2003) 『日本語文法の謎を解く』 ちくま新書
- 金田一春彦 (1955) 「日本語」『世界言語概説 下』 研究社
- Kuno, Susumu (1972) The Structure of the Japanese Language. Cambridge: The MIT Press.
- 小島義郎 (1998) 『日本語の意味 英語の意味』 南雲堂
- 三上章 (1953) 『現代語法序説—シンタクスの試み』 刀江出版(復刊 1972 くろしお出版)
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い—日本文法入門』 くろしお出版
- 宮本淳子 (2013) 「発話頭の「は」が生み出す「共話」—配慮の二面性の解明を目指して—」常葉大学短期大学部紀要 第 44 号 19-32
- 中村芳久 (編) (2004) 『シリーズ認知言語学入門 第 5 巻 認知文法論Ⅱ』 大修館書店
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』 くろしお出版
- 中村芳久 (編) (2004) 『シリーズ認知言語学入門 第 5 巻 認知文法論Ⅱ』 大修館書店
- 奥津敬一郎 (1993) 『「ボクハウナギダ」の文法—ダとノー』 くろしお出版
- 坂原茂 (1990) 「役割、ガ・ハ、ウナギ文」『認知科学の発展 第 3 巻』 講談社
- 下谷麻紀 (2010) 「発話頭に現れる助詞「は」の使用とその相互行為上の役割：自然会話における文構造の一考察」関西外国語大学留学生別科日本語教育論集 第 20 巻 97-118
- 高橋潔 (1992) 『現代英語事情』 ジャパンタイムズ
- 高本條治 (1995) 「ウナギ文」の語用論的分析 (1) —文脈における語彙統語構造の発展と拡張— 上越教育大学研究紀要 第 15 巻第 2 号 123-136
- 高本條治 (1996) 「ウナギ文」の語用論的分析 (2) —文脈における語彙統語構造の発展と拡張— 上越教育大学研究紀要 第 15 巻第 2 号 405-419
- 山本幸一 (2006) 「ウナギ文」の分析—連結メトニミーとして— 『言語と文化 (7)』 121-140 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻
- 山梨正明 (1988) 『比喩と理解』 東京大学出版会

-
- ⁱ 「彼、あの人、今日、去年、ここ、あそこ」などの語は、直示的 (deictic)、あるいは指標的 (indexical) とよばれる語類であり、本来的にコンテキストがなければ同定できない。固有名詞も多くの場合ここに属す。こうした表現が何を指すかを明らかにするのが飽和 (saturation) である。(今井・西山 (2012: 64))
- ⁱⁱ Sentence 15 は He is the spaghetti. という文。
- ⁱⁱⁱ 例文番号は筆者が新たに付けたものである。
- ^{iv} 取り上げた例が注文する時の例ではないことと、藤本 (2002) では「注文の際」より「注文品をもらう際」の用法が多いと指摘されている。
- ^v 高本 (2006) では、話し手の目の前のメニューにある「うなぎ丼」のような指示対象を示す名詞を「ウナギ」、料理品目のサブクラスとしての「うなぎ丼」のようなクラス概念を示す場合は「<ウナギ>」と記述している。
- ^{vi} 紙面の都合上本稿では扱うことができないが、日本語は主格助詞と題目助詞の双方を有する言語であり、「題目－評言 (topic-comment)」という文法関係が文法構造の記述で重要な役割を果たし、この点において英語と異なると考えられている。(中村 (2004: 252-264))
- ^{vii} 総称名詞句 (generic noun phrases) とは、人、動物、物などの総称を表すものであり、例えば、一般的に言う「人間」、「アメリカ人」、「猫」、「食べ物」などがそれに当たる。Kuno(1973:41-42) によると、これらの総称名詞は、談話上、話し手／聞き手の登録情報として既に存在するものとして扱われるため、照応・予測しなくとも、助詞「は」が付加され主題として成り立つとされている。
- ^{viii} 「こんなにゃくは人間が太らない。」と解釈することもでき、「象は鼻が長い」というタイプの文と同類であると考えられるため、「コンニャク文」については今後の分析の課題である。

